

PhRMA（米国研究製薬工業協会）主催

「高齢国・日本における NCD(Non-Communicable Disease) 対策の重要性」をテーマに
“NCD” の認知拡大を推進すべくシンポジウムを開催
～報道関係者を中心に『情報発信源』となり得るオピニオンリーダーが集う～

日時:2012年11月26日(月曜日)

場所:大手町サンスカイルーム 27階「ルーム D」

当会は、去る2012年11月26日、報道関係者を中心に医療従事者や製薬会社の広報担当者等、医療政策のあり方について『情報発信源』となり得る関連のオピニオンリーダーを対象に“NCD(Non-Communicable Disease)”に関する日本国民への関心喚起と知識普及を目指す第一歩のとして、情報共有を目的とするシンポジウムを開催しました。

これは、世界の全死亡者数の63%にあたる3,600万人がNCDによる死亡であるという現実や、日本における本格的な高齢化社会の到来を背景に、来たる2013年度からスタートする「第二次健康日本21」でも、NCD発症の要因となる、喫煙・アルコール摂取などの個人の生活習慣の改善や糖尿病患者の重症化進展抑制に関する数値目標が盛り込まれる等、急速に進む、行政による予防医療推進の動きを当会が民間の立場から後押しすべく、国民に対して“NCD”という言葉の認知拡大を図るために実施したものの。

シンポジウムの前半では、NCD対策に関連する4名の講演者がそれぞれの立場から講演を行いました。

はじめに、米国研究製薬工業協会(PhRMA)US本部国際協力部門副部長のクリス・ワード氏が「米国におけるNCDの問題点と取り組みの現状」を講演し、これを受けて、『慢性疾患と闘う団体』政策担当ディレクターのキャンデース・デマテイス氏が「健康を増進する医療政策への転換を目指して」をテーマに講演しました。日本の医療従事者の立場からは、福島県立医科大学医学部地域・家庭医療学講座教授の葛西龍樹先生が「地域医療において、NCDの予防・早期発見に重要な役割を担う“家庭医”とは？」をテーマに説明し、続いて、全国健康保健協会(協会けんぽ)沖縄支部企画総務部保健グループ長の新垣清乃氏より「被保健者の高血圧・糖尿病重症化予防事業について～協会けんぽ・沖縄支部の保健指導事例」を発表しました。

後半のパネルディスカッションでは、厚生労働省健康局がん対策・健康増進課課長の宮寄雅則氏が「健康日本21(第2次)の取組」について概況を説明した後、その上で、当会予防医療・疾病管理委員会委員長の長瀬敏雄氏(MSD株式会社)がモデレーターとなり、前半に講演した4名の講師を加えて、ディスカッションが展開されました。

ディスカッションでは、“NCD対策として臨床上重要な役割を担う「プライマリーケア(家庭医)に対する社会的評価地域格差」等の課題において、「社会的な認知度をさらに上げる必要がある」、「協力体制を確立しなければならない」、「施策の対象者や地域などの具体化が重要」といった意見が挙がり、国としての考えや計画を踏まえて、NCD対策に関して、多面的に討論されました。また、患者としてNCDに適切に取り組むためには、個人個人の治療に対する積極的な関与が重要であることも、議論を通して確認されました。

本シンポジウムには47名の方々が聴講し、参加者からは、「NCD対策は今後益々重要に至るとの認識を深める良い機会であった」「NCDの浸透を願いたい」などのコメントがありました。

<シンポジウム模様>

クリス・ワード氏



キャンデース・デマテイス氏



葛西龍樹氏



新垣清乃氏



宮崎雅則氏



パネルディスカッション風景



全体の風景

